JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2023年
No. 152
2023年11月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2023 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2023 in 仙台 報告① ‥ 1
SEE性教育アカデミー 2023 in 仙台 報告② ‥ 3
世界性の健康デー東京大会2023 報告 ‥‥‥ 9
わたしたちの性教育アクション⑧‥‥‥‥‥‥ 12
多様な性のゆくえ㊾‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 13
出会いは世界を広げていく⑧‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
今月のブックガイド‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
JASEインフォメーション ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16

◉ SEE 性教育アカデミー 2023 in 仙台　報告①

性問題行動のある人の SST
～当事者のニーズを偏見なく把握するために～

仙台市での体験型ワークショップ

9 月 3 日（日曜日）に行われた SEE 性教育アカデミーは、2023 年 3 月 25 日（土曜日）、京都市の同志社大学今出川キャンパスでの体験型ワークショップ「性と対人関係に課題をもつ当事者の回復を支援する SST ～生きる力をつける SST ワークショップ～」の続きである。仙台市の副都心が一望できる景観の中に、日本で 2 番目に大きいと言われる高さ 100 メートルの真っ白な観音像（仙台天道白衣大観音）が見えるエバーグリーンシティ・寺岡の 13 階パーティールームで開催された。

SEE（Sexuality Education & Empowerment）は、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた 10 年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として 2018 年に開講した。これまで概ね関西地区で年 2 回のペースでセミナーを開催してきた。東北地域での開催は今回が初めてである。

参加者と前田ケイ氏（右から3人目）と藤岡淳子氏（4人目）

今回のテーマは、「性問題行動のある人の SST ～当事者のニーズを偏見なく把握するために～」で、前回京都でのセミナーを踏まえてより具体的な内容になった。参加者は、地元宮城県近郊だけでなく北は北海道から西は島根県まで、またアメリカのマサチューセッツ州の大学からの参加者もあった。

講師は前回同様、前田ケイ氏（ルーテル学院大学名誉教授）、ファシリテーターは藤岡淳子氏（大阪大学大学院名誉教授）である。講師・スタッフを含めて 19 名が参加した。

ここで、前回（2023年5月号No.146）と重複するが、「SEE 性教育アカデミー」とSST（ソーシャルスキルトレーニング）について説明する。

「SEE 性教育アカデミー」では、From What to Learn to How to Learn（何を学ぶかから、どう学ぶかへ）をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だけでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

前回と同じ説明だが、SSTとは「当事者が支援者と一緒に考えながら、特定の対人状況の中で自分が取りたい行動の具体的な目標を決め、練習をして、必要な認知（考え方）と行動の能力を身に付けていく方法のこと」(前田ケイ著『保護司面接のためのSST』p.2, 日本更生保護協会)。主語は、「当事者」であり、支援者が〈やらなければ〉と気負うのではなく、当事者と〈一緒にやっていく〉ものである。支援が終結したあとも、当事者が自分の行動を考え、意思決定できるようになることが目指される。話し合うだけでなく、実際に練習をしてみるところがSSTの核心である。

講師である前田ケイ氏についても、経歴を簡単に紹介する。

現在、SST普及協会の認定講師および顧問、ルーテル学院大学名誉教授。ハワイ大学を経て、コロンビア大学大学院ソーシャルワーク修士課程を卒業後、1988年から東京大学附属病院精神神経科デイホスピタルにおいてSSTの日本への導入に尽力。その後、日本各地での精神科患者のリカバリーのためにSSTの普及にかかわり、更生保護や矯正教育分野でのSSTの実践および支援者の養成に当たっている。

SST及び今回のワークショップの具体的な内容については、SEEの共同代表である野坂祐子大阪大学大学院教授が、後半（3ページ以降）でレポートしているので精読していただきたい。

プログラムと体験者の声

大学の学生・研究者、学校の教員、病院や更生施設の臨床心理士やケースワーカーなど多様な職種の受講者に講師・スタッフを含め19名全員が、円座になって10時30分より「SST体験ワークショップ」が始まった。プログラムは、午前中「SSTを体験しよう（前田ケイ氏の講義と演習）」、「質疑・SST体験のわかちあい」、「交流会（歓談しながらランチタイム）」、その後、13時30分から15時まで「性問題行動のある人のSST」、休憩をはさんで15時15分から16時20分まで「参加者同士の対話」、16時20分から16時50分まで「わかちあい」と充実したワークショップであった。具体的な内容は、野坂祐子氏のレポートに譲って、ここでは、受講後の参加者の感想の一部を紹介する。

○皆さんとグループで当事者の方の思いについて学べて勉強になりました。

○先生たちと参加者同士は日本語がまだ上手じゃない私の世話をしてくださって本当に感謝しております。いろいろ勉強になりました。

○全体を通して前田ケイ先生のメタスキルを感じさせていただいたと今感じています。グループで何が大事なのかということを教えていただきました。現場で今日学んだことを挑戦していきます。

○ SSTの技法だけでなく、支援者としての態度について本当に再度考えさせられ、とても貴重な体験をありがとうございました。

○ SSTのロールプレイがわかちあいの時間で消化できた感じがしてよかったです。ロールプレイの進行役は参加者から希望者をつのっていただくのもよかったように思います。

○ケイ先生の言葉がどれも「はぁー」っと納得、感心するばかりでした。ただただ感じることのできた時間でした。

○ SSTとは何か、前田ケイ先生の偉大さを知らずに野坂先生と藤岡先生を追っかけて京都から学びに来たのですが、参加してみて本当に学びがたくさんありました。普段教師として生徒と接する際にも生徒という当事者のニーズを把握してこようとしてきたのか問われたように痛感し、後ろ暗い気持ちになりました。私は対人援助学の学びの途中にいるのですが前田先生の当事者へのまなざし、関わり方をこの目で見ることができてとても幸せな気持ちになりました。SEEスタッフの皆様、素敵な企画をしていただき本当にありがとうございます。今後も学び続け行動していきます！

（文責　編集部）

◉ SEE 性教育アカデミー 2023 in 仙台　報告②

SSTを通した当事者の理解と支援者の姿勢

性問題行動へのよりよい対応に向けて

SEE 共同代表、大阪大学大学院教授　野坂 祐子

期待に満ちたスタート

ワークショップは、受講者や講師・スタッフが全員、お互いの顔が見えるように椅子で円座になってスタート。少し緊張した面持ちも見られたが、あちこちで笑顔があふれ、明るい雰囲気だった。全国各地から、それぞれの期待を胸に仙台の会場に集ってこられた様子がうかがえた。

本年３月に京都で開催したワークショップにも参加され、SST の有用性について手応えを感じただけでなく、講師の前田ケイ氏のおだやかであたたかいお人柄に惹かれた受講者も多くおられたようだ。前回に引き続き受講された方に加え、クチコミやご自身の業務上の必要性などから、初めて SEE 性教育アカデミーのプログラムに申し込まれた方もあり、「対話」基盤の学び合いのネットワークが広がりつつあるのが感じられた。

SEE 性教育アカデミーでは、包括的性教育の実践を広めるうえで、対象者の行動を変えようとするのではなく、支援者や教育者が自分の考えや感情に気づき、対話による関係性が築けるようになることを重視している。そのため、今回の仙台ワークショップでは、SST の基礎を学んでスキルの演習を行うとともに、参加したメンバー同士の交流（ランチタイム）や分かち合いの時間を設けることにした。

まずは、メンバーの自己紹介から。受講者は、児童精神科や精神病院、刑事施設や保護観察所、行政、民間の支援機関、学校、大学など、さまざまな現場で活動されており、専門性や立場も多様であった。SST

の対象範囲が、子どもから大人まで幅広いこと、さらに、今回の研修のテーマである「性問題行動」があらゆる領域で対応すべき課題であることを表していよう。日本の性教育について学ぶために海外から参加した受講者もおられ、交流が深まった。

参加動機の共有では、すでに SST を実務に取り入れ、取り組んだ当事者から「生活が楽になった」というフィードバックが得られたという報告もあった。多くは「SST（のようなもの）を活用している」ものの試行錯誤しながらであり、講師の指導を受けてよりよい実践につなげたいという目的が話された。

ソーシャルスキルトレーニングの基礎

午前中は「SST の基礎」として、定義や用語について学んだ。講義も一方的な説明ではなく、講師（前田ケイ氏）がメンバーの意見や質問を受けながら、その場ですぐに SST のさまざまな技法のデモンストレーションが始まるというインタラクティブなやり方であった。講師の実践例や SV（スーパーバイズ）(1)の経験から、発達障害の子どもや精神疾患のある成人、非行や犯罪によって施設に入所している人など、さまざ

まなニーズをかかえた人の事例が話され、とても臨場感のある講義だった。

改めてSSTの定義を確認すると、「当事者が支援者とチームを組んで、特定の対人場面における当事者本人の目標達成に役立つものの考え方（認知）と行動を、練習によって身につけていく方法のこと」である。SSTを説明するうえでの主語が「当事者」であることが重要である。確かに支援者が使う方法ではあるが、支援者のためにやるのではない。当事者が「これ（SST）は自分が使える方法だ」と実感し、「支援者と離れてからも、自分で『待てよ、もっといい方法はないかな』と自分が使える方法になったほうがずっとエンパワー（有力化）する」と強調された。講師が、当事者に語りかける「あなたが使える方法ですよ」という言葉は、本人を励ますだけでなく、行動の責任を本人に委ねるものだとも感じられた。

初めのうちは、当事者は「コーチ」のような支援者に教えてもらいながら練習していく。SSTで大事なのは、一般論を教えるのではなく、〈本人が、だれに対して、いつ、どこで、どういう結果を期待するのか？〉という目標を明確にしたうえで取り組むことである。ただ、「意見がはっきり言えるように」とか「衝動的な行動をとめるために」というのではなく、その人自身が特定の相手との〈関係性〉のなかで、具体的に自分が持ちたい考えやできるようになりたい行動（希望）に焦点を当てて練習していく。

目標は「いつか…」という長期目標、3か月程度の短期目標、今できる練習の目標（獲得目標）がある。目標があることで、どこまで達成できたかがわかる。そして、その目標達成に役立つ認知を身につけるために、行動の背景にあるものの考え方や解釈を見直す。例えば、暴力という行動をやめるためには、暴力の背景にある「バカにされた」という考え方を見直す必要がある。その際、グループでのSSTならば、メンバーからいろんなアイデアが出てくる。こうしたグループの力を活用するのが実践の鍵である。

また、行動は言葉で表現される言語的行動だけでなく、声のトーン、ボリューム、ピッチといった周辺言語的行動、さらに体全体で表される非言語的行動がある。たしかに、コミュニケーションの練習（SST）というと「どう言うか？」が頭に浮かぶが、視線や姿勢、態度といった非言語的表現によって、コミュニケーションに大きな説得力を持たせることができる。

SSTの方法とは、〈ある目標を達成するための順序だったやり方〉であり、方法のなかで使われるテクニックを技法という：例）サイコドラマで用いるロールプレイや役割交換などの諸技法など。練習では、主に次のようなトレーニングモデルがある。①行動リハーサル：例）忙しい相手を呼び止めて、話しかけるときに「ちょっと1分いいですか？」といったセリフを一緒に考えてからやってみる、②問題解決法：行動の選択肢を複数挙げて、特定の問題解決のための自分の認知レパートリーの幅を広げる：例）頼まれた仕事を「断るか、引き受けるか」の2択ではなく、「交渉する」などの別の選択肢を考える、③認知再構成法：違う考え方に置き換える：例）腹が立った場面で自分の考え方（自己会話）を見直し、怒りをコントロールする、④現実場面での支援付き練習（in vivo practice）：学んだことを実際の場で支援されながら、実行してみる方法もある。

「すごい！」当事者のニーズに沿う

講義のなかで次々と話されたエピソードのなかで、印象的だったものをふたつ紹介したい。

まず、周囲と話せない成人男性の事例。彼は話せないのではなく、本人としては「意味のある話しかしたくない」という。講師が〈意味のある話って？〉と尋ねると、人はなぜ生きるのか？ といった哲学的な話であることがわかった。話を聞いていた筆者としては、内心、「いやぁ、その話題は会話には向かないだろう……」と思っていた。そして、どうやって別の話題を探せばよいだろうかと考えていた。

ところが、講師は笑顔でこう続けられた。「すごいわよねぇ！」。本人にも「すごい！ とても大事な話ですね」と伝え、具体的には３つの椅子を並べ、話の順序として、まず、第一の椅子は、挨拶をし、第二の椅子は共通の話題、（「昨日のサッカー見た？ すごい試合だったよね」）、第三の椅子は「それにしても、人はなぜ、あんなに頑張れるのだろうか？ 人は何のために生きているんだろうね、という順序で会話は発展しませんか」と説明したところ、本人も納得。そして、挨拶をするSSTを行い、実際の場で自分から話しかけたことで相手の笑顔を見た彼は、「会話って楽しいですね」と次のセッションで述べたという。

ここで講師が行ったのは、SSTの定義にある〈当事者本人の目標達成に役立つ〉ことをめざした介入である。筆者が思い浮かべた「会話にふさわしい話題を考えさせたい」という考えは、彼のしたい話ではないのだ。当事者のニーズを理解し、その目標が達成できるように援助するのがSSTである。目標達成をただ願うのではなく、具体的な方法と技法で練習をしていくのである。

また、「すぐに手が出てしまう」という子どもが、自傷行為をするようになったという。本人は、「人を殴るのはよくないから、自分を殴る」と言っている。周囲の大人としては、すぐに自傷行為をとめさせたくなってしまうものだが、このときもSSTでは子どもの考え方に注目する。そして、「相手を傷つけない」という考えを十分にほめることで、「自分はできる」という考え方ができるようになっていく。それによって、子どもは自分を殴るだけでなく、「自分をほめる」という行動もできるようになるかもしれない。「そのほかの考え方はないだろうか？」と選択肢を広げていく問題解決法を活用したエピソードである。

こうした取り組みは、とりわけグループで有効である。〈いい場〉が与えられていれば、自由に話すなかでさまざまな気づきが得られる。このように少し教えて、認知と行動に焦点をあてる介入はTeaching Therapy（ティーチングセラピー）とも呼ばれる。1990年代から発展してきた認知行動療法は、こうした自傷行為、加害行為、ゲーム依存などの子どもにも役に立つ。

性問題行動やアディクションへのSST

会場で用意されたおいしいビュッフェのランチを楽しんだあとは、刑事施設で性犯罪をした男性の再発防止教育に携わっている方の進行で、ロールプレイを体験した。複数のタイプの性犯罪者のロール（役割）を演じるだけでも、いろいろ自分の内面の動きを感じたと報告する受講者もいた。

ロールプレイのあと、講師がいくつかの場面を取り上げ、介入技法が紹介された。例えば、ロールプレイ中のサポートは、役割演技の流れを損なわないように、「カーテン」と呼ばれる技法で「見えない設定」をし、対象者に「何が見える？ 今、何してる？ なんて言いたい？」などと教示し、状況を明確にしてSSTのターゲット行動を確認する。このカーテン技法は、支援者同士がその場でオープンに介入の方法を相談するためにも使われる。ロールプレイでは、話す練習をする前に、話す場面をつくるところから始めるなど、スモールステップで進めることも大切である。

また、メンバーがグループのなかで自己開示ができない場合のサポートとして用いられる「ダブル」の技法も紹介された。支援者が当事者の隣に座り、「もう一人のあなた（分身）になりますから」と説明する。「もし、あなたの考えと違ったら、そうは思わないって言ってくださいね」と伝え、本人が思っていても口に出せずにいるであろうことを言語化する。同じポーズをとって、隣に並ぶと、当事者は味方を得たような安心感がわき、心細さが軽減する。即興で、講師が受講者の「ダブル」になり、「これだけの人数がいたら、話しにくいよねぇ」とやりとりを展開させた。体験し

た受講者の喜びの声に、会場も大いに沸いた。

グループセラピーのロールプレイでは、支援者が一人のメンバーと話し込んでしまうことで、他のメンバーを置き去りにしてしまうことが起こりうる。メンバー全体で話題を共有し、「実は自分も…」と話せるようにすることが大切である。そのためには、グループサイズも重要であり、人数が多いときには小グループやペアなどのサブグループをつくるのもよい。また、室内にはSSTの手順を示すポスターを用意する。当事者のためだけでなく、支援者が慣れるまで必要となる。

今回のワークショップでは、性問題行動だけでなく、薬物使用のある人に関わる支援者も参加していたため、当事者が他者から再使用を誘われたときの対応についての質問があった。講師からは、本人にとって「これだけは譲れない」というものを探し、本人がもっとも言いたいことを言えるように練習するように、との助言があった。また、飲酒問題をかかえる人への対応について、本人が「誘いを断れなくて飲んでしまった」と言い訳をする場合、SSTで断る場面を取り上げるのが妥当かどうかの質問もあった。それに対して、「やる気がなければ、練習できない」というのが講師の回答であった。あくまでも当事者のニーズを理解するために、「生活のなかで、どういう人とつきあって、どういうふうにしたいのか？」などと聞いていく。日常生活でどういう人間関係があるのかを「コインマップ」[(2)]の技法を使って共有し、どんなことが起きているのか、どうしたいのかを話し合う。

性問題行動のある人には、性衝動の引き金にどう対処するかを話し合うこともある。まず、本人が衝動のきっかけを自覚していることを「気づいているのはすばらしいですね」と受けとめ、特定の場面を想定してロールプレイを行う。実際に演じてみるほうがイメージできるので、話し合うだけよりも効果がある。

ロールプレイに参加したメンバーの感想からは、役をとりながら「口では『やります』と言っても、内心はやりたくない気持ちもあるだろう」、「支援者役が一生懸命関わってくれているのは伝わるが、自分に向き合えずに思考停止してしまった」、「支援者との上下関係ではなく、対等な関係性が大切」、「メンバーで共通したパターンを探していけるとよいのではないか」などのコメントが出された。

ここで講師から、家族関係を扱う際の技法として「人間彫刻（ヒュウマン・スカラプチャー）」が紹介された。家族療法から生まれたもので、メンバーのポーズで家族関係を表現する手法である。これは家族造形法と呼ばれている。家族の立ち位置や心情をポーズで表し、３分間フリーズすると、役をとった人も見る人も、さまざまな感情がわく。家族によってニーズが異なるので、問題が発覚して間もない家族が、数年経って安定した他の人の家族像を見ることで、家族こそが回復へのリソース（資源）だと認識しやすくなる。

家族会でのエピソードをもうひとつ。「男なんて、最期に一言礼を口にするもの」と考えている夫から「一度もねぎらわれたことがない」と言う妻たちを前に、講師が「すぐにお礼を言われたい人は？」と尋ねたところ、全員が「はーい」と手を挙げた。それを見た夫たちはさっそくその晩から感謝の気持ちを伝えるための練習を始めた、というもの。家族のコミュニケーションを円滑にするために、当事者のニーズを明らかにしながら、ユーモアをもって扱う大切さを学んだ。

SSTを安全に行うコツとして、講師は「ほんの少しがんばればうまくいくという見通しがもてること」を挙げられた。人と話をするという作業でも、どういう場面を選び、どんなタイミングで話しかけるか、本人が話したい話題は何かなど、幅広く検討する。話しかけるには、コミュニケーションの「NO－GOサイン」を見極める必要があり、たくさんのステップがいる。当事者の力で何ができるかに合わせなければ、ロールプレイがたんなるお芝居になる危険性を指摘された。

性問題行動への介入

研修のまとめとして、もう一人の講師である藤岡淳子氏から「性の問題を扱うときに、どのようにSSTを活かせるか」という点から解説がなされた。性問題

行動への対応では、いろいろな扱い方があり、プログラムもさまざまである。中核的なモジュール（内容）と留意点として、次のことが挙げられた。

①サイクル図：性問題行動がどのように起きているかの循環を示したサイクル図を作成する。サイクルを止めるためのセルフマネジメントプランをきれいに作成することを目指してしまいがちだが、図や表の完成は副産物にすぎない。いかに、本人が性問題行動を防ぐ気になるかが重要である。②思考の誤り：犯罪行為を支える考え方。「触っても減るもんじゃなし（たいしたことではない）」といった考えを扱うのは必須であり、やりとりのなかでも常に注意を払う。③対人関係・コミュニケーション：このなかでSSTを入れることができる。④被害者の理解：被害者への影響について教える。ここで、被害者を想定してロールプレイを行う方法をとる人もいるが、慎重さが求められる。これらのモジュールを扱ったあと、改めてサイクル図を見直すと、「自分はどうやって性犯罪に至ったのか」がわかる。やめていく覚悟をきめて、そして再発防止のためのプランを立てていく。

藤岡氏によると、性犯罪をする人は、基本的には「人が好き」であり、人から認められたい、関わりたいという対人ニーズが高い人であるという。関わりたいから、女性に甘えようとする。本当は、対人関係をうまくやりたいという対人欲求が強い。サイクル図やコミュニケーションを扱うなかで、妻や上司とうまくいかないといった対人関係の問題が性犯罪につながるリスクになっていることに気づけるようになる。対人トラブルがあったときの状況を例に挙げてSSTを行い、自分の思いをきちんと伝えたり、交渉したりする練習をすることができる。

男尊女卑的な価値観がある人への対応では、それを正そうとするのではなく、「どこからそうした価値観を身につけたのか」を理解し、そうした考え方で他者との幸せな関係が築けているのかを話し合いながら、思考の誤りを修正していく。

また、性問題行動のある人は感情の扱いが苦手なことが多いので、感情を解きほぐすためには、メンバー同士の対話を重ねるサークルや治療共同体（Therapeutic Community：TC）が有用である。認知行動療法だけでなく、そうした関係性を基盤としたやり方が推奨された。講師はさらに、感情が苦手なのは「教える側も同じ」と指摘し、支援者もまた安全に感情体験ができる機会をもつことの重要性を強調された。

受講者からは、家庭内の性的虐待や性問題行動の開示に関する質問が出た。藤岡氏は、性的虐待について、加害者が「向こう（被害児）から誘ってきた」と責任転嫁しがちであり、多くが一定の社会性を有しているがこうした思考の誤りが顕著にみられると説明した。また、加害者が育った原家族の境界線がゆるく、とりわけ母親との密着した関係性があることも説明された。こうした家族の境界線侵害は、親子のどちらもそれを自覚できていないことがほとんどである。性的虐待の加害者は、被害児や家族をむしろ「大事にしている」つもりでいるが、「どうやって大事にしたらよいのか」わからないのだという。

また、性問題行動の開示については、対象が少年と成人では異なる面がある。少年の場合、ゆるやかなところから入って、自分がしたことの開示に至ることが多い。従来、成人に対しても、加害行為の内容に触れないようにする支援機関もあったが、最初から開示を扱うほうが治療教育のなかで何をしたらよいのかがわかってよい。そのためには、面接やグループにおいて守秘のルールをきちんと定めて、しっかり守ることが欠かせない。それがなければ、安全に話すことはできないと強調された。変化のためには、個人のなかだけで理解するよりも、他者とくにグループに対して話すほうが影響が大きく、変化につながりやすい。

まとめ：参加者同士の分かち合いから

最後に、藤岡氏の進行により、受講者全員で感想の分かち合いを行った。講師（前田ケイ氏）が講義のなかで紹介や実演をされたさまざまなSSTのスキルについて、「当事者のイメージを豊かにする」、「メンバ

一同士が、そのイメージでつながることができる」などと感じた方もいた。また、性問題行動に対しては、支援者の側にも「何がでてくるかわからない」という恐れの気持ちがわき、対応において腰がひけてしまいやすいと感じていた方が、「自信をもってスキルを使っていきたい」と話された。さらに、これまでの支援者自身の対応について、「よかれと思ってやってきたことがまずかった」とふりかえり、これからも今回のようなロールプレイによる実践的な学習を続けていきたいといった意欲も語られた。ロールプレイに参加した方からは、「自分の気持ちが動いた、変化した瞬間を感じられた」として、業務で関わっている当事者の気持ちを想像できたという声もあった。

藤岡氏は、「前田先生の愛と人柄を感じた。相手のいいところを見つけるとか認めるとかではなく、心の中に平和がある」とコメントされ、前田氏の「スキルにとどまらない援助者としての姿勢」に敬意を払いつつ、「スキルというカードをたくさん持つことも大切」だとまとめられた。

「心の中に平和がある」という感覚は、受講者の多くも感じられたようである。そうした援助者としての姿勢は、前田氏が重視する Peaceful environment（平和的環境）にも表されている。受講者から「SST というより聴いてもらっている感じ」という感想もあったように、当事者へのリスペクトが援助の基本であることを再認識することができた。

本テーマの「当事者のニーズを偏見なく把握するために」は、スキルにとどまるものでなく、支援者が当事者の思いにしっかりと耳を傾け、（当事者だけでなく）支援者自身の思考の誤りを認識し、自分の感情をうまく伝えられるようになる必要がある。支援者同士が対話による関係性を構築していくことは、対人援助職や教育者にとって欠かせないことだといえよう。

この場を借りて、改めてご参加いただいた皆さまと講師のお二方にお礼申し上げる。余談だが、前田氏は今回の研修依頼について、息子さんから「どうしてこんな歳をとった人を講師に呼ばなきゃいけないの⁉日本の福祉が心配だよ」と言われたというエピソードを紹介された。92 歳を迎えられてなお、エネルギッシュに活躍されている前田氏が惜しみなく伝えてくださったたくさんの経験と智慧を大切にして、性教育や性の支援を広げていきたいという思いを新たにした。

【注】

(1) SV（スーパーバイズ）とは、これから取り組もうとする支援、または今取り組んでいる支援について、スーパーバイザーにアドバイス・指導をしてもらうこと。 所属機関内外の実務経験者や関連領域の専門家等がスーパーバイザーを務めることが多い。

(2) コインマップとは、当事者が、いま自分と関わりのある人たちとの関係をどう感じているか、その気持ちに従って一つひとつコインを置いていく方法。

JASE性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

資料室利用方法

【閲覧予約】事前に電話で予約が必要〔11月27日（月）からtel 03-5801-6788〕。貸出業務は行っておりません。
【開室日・時間】月～金曜日しばらくの間 11: 00 ～ 17: 00
【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始　※この他、会議等で臨時に休室することがあります。
【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚 10 円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。
https: //www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、セクソロジー、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集、ダイアモンド文庫、ほか。

→資料検索

https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy_N7GNQ_WQaeg

休室のお知らせ

移転のため、下記の期間を休室と致します。
移転先の詳細は16ページを参照。

【休室期間】
2023年10月23日(月)～12月1日(金)
【開室予定】
2023年12月4日(月) 11時～

◉東京性教育研修セミナー 2023 夏／第 14 回世界性の健康デー東京大会・報告

CONSENT ／同意

9 月 9 日（土曜日）第 14 回目となる「世界性の健康デー 2023 東京大会」が東京都豊島区池袋の STUDIO M Ikebukuro Tokyo で開催された。本年は「CONSENT ／同意」が世界共通テーマである。今回は 4 年ぶりに会場での対面開催となった。プログラムは 3 部構成、それぞれのテーマは、セッション①「性教育の中で同意をどう伝えるか？」、セッション②「“権利”という難しそうなものが少し分かるかもしれないワークショップ」、セッション③「私が見た世界の“同意”事情」。

ここでは、参加者の感想を中心にイベントの模様を紹介する。

はじめに

午前 10 時 20 分より実行委員長を務めた柳田正芳氏の挨拶から 4 年ぶりの対面開催の「世界性の健康デー 2023 東京大会」が始まった。

「世界性の健康デー」については、今大会のプログラムに「ごあいさつに代えて」として掲載されているので引用する。

〔「世界性の健康デー」は、性科学分野における世界最大の国際組織「性の健康世界学会（WAS：World Association for Sexual Health）」が提唱する国際デーです。2010 年から毎年 9 月 4 日を「世界性の健康デー」と定め、性の健康（セクシュアル・ヘルス）と性の権利（セクシュアル・ライツ）を推進していくことになりました。性の健康世界学会が定める世界共通テーマのもと、9 月 4 日前後に世界中で様々な活動が展開されています。

2023 年の世界共通テーマは「CONSENT（同意）」です。日本における性教育は長い間、「妊娠／避妊」、「性感染症予防」をはじめとした、身体の健康に関する知識の普及を中心としてきました。国際的には 2000 年代から「包括的セクシュアリティ教育」と呼ばれる性教育の考え方が登場してきており、身体の健康の前提にジェンダー平等や人権の視点が重要であることが知られるようになってきました。包括的セクシュアリティ教育においては、早い段階で人間関係や人権、ジェンダー平等といった学習目標が登場します。

今年のテーマである「同意」はまさに、人間関係や人権、ジェンダー平等と深く関わる概念です。日本でも近年「性的同意」という言葉が注目されるようになってきました。性的な場面での同意のためには、日頃の人間関係において Yes や No を言えることが必要であり、日常の関係性作りから重要視される必要があると思います。日常の人間関係の中に互いの権利を尊重し合う平等さがなければ有効な性的同意は難しいと言えるでしょう。

今日は「同意」という言葉をきっかけに、人間関係や平等、尊厳、権利といったことにも思いを馳せる時間になることを願っています〕

◆セッション①
性教育の中で同意をどう伝えるか？

10 時 30 分より、ギリシャで性教育の活動を実践する Margarita Gerouki 氏による 30 分のビデオ講義「性

セッション①のビデオ視聴後にグループに分かれて話し合い

教育の中で同意をどう伝えるか」(日本語字幕付き）を視聴したうえで、参加者が幾つかのグループに分かれて「同意とは何か」、「性教育の中で同意をどう伝えるか」について話し合った。以下参加者の声を紹介する。

★同意にはまず自分の気持ちを知り、表現しなくてはならないので、その訓練が出来る環境を大人が用意する必要があると分かった。

★他国の性教育事情を知る機会は少ないので、貴重な機会だったと思います。とかく「日本は性教育が遅れている！」となりがち（まぎれもない事実だけど）ですが、進んでいるように見える国でも課題はあるのだと感じた。社会は変わるし、子どもを取り巻く環境もかわるので、「これで完成形！」というのがないのが性教育なのだろうなと。

★同意を伝えるためには快・不快の自己感がないと、相手に伝えられない。快・不快を意識する経験が必要。同意が変わる可能性があるのは、どうなるかわからないから。

★行為が始まる前に同意を取るだけでなく、行為が始まった後もこまめに「リアルタイム同意」を取ることの重要性を再確認できました。

セッション①の終了後、昼休みの前に、ブース出展団体の紹介があった。出展団体は、「日本性科学会」、「I LADY.」、「性の健康イニシアチブ」の３団体。この大会に毎回出展していた「セックスミュージアム設立準備委員会」と、初めて出展予定だった「性教育サークル Sexology」は、事情により直前に出展辞退となった。

大学生が中心になっている「I LADY.」の活動に対しては、次のような感想が寄せられている。

ブース出展の「I LADY.」の団体紹介

★ I LADY. の若者たちがとてもまぶしかったです。

★それぞれ、熱心な活動がよく伝わる様子でした。フレンドリーに接してくれて良かったです。

★ I LADY. 作成のカードが興味深く、この年代からこれだけしっかりした考察ができる女性たちの姿を見せていただけて、日本の未来に希望が湧きました。

★ I LADY. さんのピアの視点からのアプローチの大切さを改めて感じました。

★ジョイセフの学生さん（I LADY.）が自主的にいきいきと活動しているのを見て、次世代にはより良い状態でバトンを渡していかないといけないと思いました。

◆セッション②
“権利”という難しそうなものが少し分かるかもしれないワークショップ

13時よりセッション②のワークショップが始まった。

性教育に取り組む際によく見かける「権利」という言葉。「大事なことは分かるけど、なぜ大事なの？」、「そもそも権利ってどういうこと？」、「権利の反対語って何？」というファシリテーターの柳田氏の問いかけに、参加者みんなで考えて理解を深めたワークショップであった。このセクションの参加者の声。

★権利の捉え方は職業，世代、経験によってさまざまであり、一言でまとめるのが難しかった。

★「権利」とは、かなり大きな枠のテーマなので最初はどうなることかと思いました（笑）。ただ、ディスカッションではみなさん、そうした概念的なことを人に伝えるときに、自分のことや身近な例をあげ

セッション②を始める前のアイスブレイク

ながら話されている印象があり、「自分たちのことを話しているのだ」という実感をえられたワークだったと思います。権利についてあれこれ考えなくていい＝恵まれた状況にいる、っていうことなのかもしれないけど、いまの日本に関しては、教育のなかで権利について考える機会がないから、単に骨抜きにさせられているだけなのかもな、とも思います。

★スムーズに進行して、いろんな意見が自然に出てきたと思う。みなさん熱心で、お話も有意義でした。ふだんの勉強会でめったに取り上げられないけれども、これからの性教育を支える概念として、このテーマについて考える機会をいただけたことは意義が深かったと思います。

★権利は誰のためかという問い、権利と共に責任がついてくる、という発言は初めてで新たな視点を得られました。自分の中で「尊厳」、「人権」、「権利」が混同していたことに気づきました

◆セッション③
私が見た世界の“同意”事情

「# なんでないのプロジェクト」代表の福田和子氏の講演。海外経験の中で見聞きし体験した“同意”について、映像を含めて語られた。

参加者からは、次のような感想があった。

★自由に考えや思いを伝えられる文化、環境がその後の生き方にも影響することを改めて知った。

★福田さんのお話は、いつも新鮮な風を日本にもたらしてくれていると感じます。セクシャルプレジャーについて、日本ではどうも後回しにされる（フェムテックの助成金など）ので、どうにかならないものかなと思います。

セッション③、福田和子氏の講演

★こちらも情報がたくさんで、かつわかりやすく、とても良かった。やはり、資料などいただけるともっと良かった。販売されているものでも、ここにこれが書いている、ということなども出てくるとありがたいと思った。

★各国の動画がお国柄と合わせて考えると興味深く、セクシャル・プレジャー宣言の紹介も良かったです。

★同意の４段階を三角で示し、相手の三角と自分の三角を重ね合わせ、重なり方によって暴力になることが視覚的に見ることができたのが、わかりやすったです。

★昨年の東京大会で知って気になっていた「the pleasure project」の具体的な内容を紹介してもらえて理解が深まりました。

今年度の「世界性の健康デー東京大会」の参加者は延べ 54 名であった。教員（教諭・養護教諭・大学教員）、医療関係者、大学生、NPO 活動家、マスコミ関係者、会社員など幅広い職種の参加者があった。

以下の様な感想も寄せられた。

★ディスカッションの時間が多く、年齢層や活動層も幅広い人と意見交換できた。講演の内容も実践的（特に福田さん）で、すぐにそれぞれの活動に取り入れられる内容だったと思う。

★リアル開催ということで、様々なジャンルの専門家や研究者と再会・出会いの場にもなってありがたかったです！

※ 2024 年度のテーマは「Relationship」

主催：世界性の健康デー東京大会実行委員会
協賛：日本性教育協会、大川玲子（個人）
後援：日本性科学会、公益財団法人ジョイセフ、一般社団法人性と健康を考える女性専門家の会、一般社団法人日本家族計画協会、一般社団法人日本思春期学会、一般社団法人日本性機能学会、一般社団法人日本性感染症学会

わたしたちの性教育アクション

#8

ゆるやかなつながりと関係性を重視し、解決を第一の目的としない

NOLIMIT 旭川（のーりみ）

無料配付している生理用品（上）と旭川市内の夜回りお散歩（下）

困難を抱える若年女性の支援を目的に

NOLIMIT 旭川（以下のーりみ）は 2020 年 12 月に活動を開始した団体です。北海道旭川市で困難を抱える若年女性（18 歳～ 20 歳代）たちのコミュニティ形成・相互協力・サポートを目的としています。

問題意識として、

①女性が困難を抱えやすい社会構造であること。

②それを個人的要因に帰結してしまう意識が強いこと。

③単身成人女性の支援が少ないこと。

④現在の支援はニーズや実情に合っておらず使いにくいこと。

があります。これらの問題は特に地方に行くほど深刻になると考えています。

私自身、旭川市で暮らしているなかで様々な困難を抱えてきた当事者でした。周囲にも同じように困難を抱える女性が多く、活動を始めたきっかけは友人から受けた相談でした。

彼女は精神的・経済的 DV を受けていて住む場所を喪失しかけていましたが、「成人している」、「仕事をしている」、「複雑な事情がある」といった理由から支援には繋がりませんでした。それを自分たちで何とかしようと考えたことが団体の立ち上げに繋がりました。

SNS を中心としたアウトリーチと LINE 相談から

活動はゆるやかなつながりと関係性を重視し、解決を第一の目的としないことで、参加のハードルを調整しています。団体設立から 2 年間が経過し、その間にウエイトを変えながら活動を継続しています。

現在行っている活動は以下の内容になります。

①アウトリーチ（市内商業施設・街中でカード等を配布しています）。

② LINE など SNS での対応（誰かと話したいと思ったときや困りごとがあるとき、匿名でお話したり、一緒に対処を考えたりすることができます）。

③のーりみベース（U29 女性のための居場所です。休憩したり、勉強したり、ご飯を食べたりできます）。

④他の支援やサービスへの仲介・同行支援。

⑤居場所に関する相談。

（次号につづく）　文責・yuki）

一般社団法人 NOLIMIT 旭川
代表　yuki

北海道旭川市で困難を抱える若年女性（18 歳～ 20 歳代）たちのコミュニティ形成・相互協力・サポートを目的として設立された。
https://sites.google.com/view/nolimit-ashkw/
Twitter：https://twitter.com/nolimit_ashkw_
お問い合わせ：nolimit.asahikawa@gmail.com

多様な性のゆくえ

One side／No side [79]

宮田 一雄

みやた　かずお

ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

PWA は犠牲者ではない

エイズ対策を進めるための共通理念として国連が重視する GIPA（HIV 陽性者のより積極的な参加）原則の源流をたどっていこう。GIPA は 1994 年、パリ・エイズサミットの共同声明に盛り込まれ、注目された。最近は対象を HIV 陽性者に限定せず、HIV の流行に影響を受けている様々なコミュニティも含めた当事者参加の原則として使われることが多い。

こうした考え方の基本が 1983 年のデンバー宣言だったことは前回も少し紹介した。宣言 40 周年を記念した UNAIDS の今年 6 月 26 日付特集記事には『GIPA 原則に向けた歴史的な第一歩として、HIV 陽性者が受け身ではなく、エイズ対策に全面的に関与する主体として意味のあるかたちで意思決定に加わることを促した』と書かれている。記事の全文およびデンバー原則宣言文は API-Net（エイズ予防情報ネット）に日本語仮訳で紹介されているので、ご覧いただきたい（欄外アドレス参照）。

この文書を『PWA 宣言』と受け止める人もいる。冒頭にこう書かれているからだ。

《「敗北」を意味する「犠牲者 victims」というレッテルを私たちに貼ろうとする試みを私たちは非難します。また、「患者」という言葉も、受動性や無力感、他者にケアを依存する存在を暗示するものです。たまたまいまは患者と呼ばれているものの、私たちは People with AIDS（エイズとともに生きる人）なのです》

GIPA 原則がパリ・エイズサミットの成果文書に明記される 11 年も前のことだ。この間に PWA（People with AIDS）という言葉は国際的に普及、定着し、1992 年 12 月に刊行した拙著のタイトルも、便乗的に『ピープル・ウィズ・エイズ』を採用した。

1990 年から 91 年にかけて、私はボストンの HIV 陽性者支援組織で押しかけボランティアとして過ごし、何度も PWA という言葉を聞いた。犠牲者ではない。医療機関では患者として扱われるとしても、それは「私という存在」のすべてを表すわけではない。そうした自負に支えられ、支援や啓発の活動に加わる人たちに何人も出会ったからだ。

では宣言はどんな経緯で世に出たのか。UNAIDS の記事は冒頭で《以下の記述は The Sero Project のショーン・ストラブ元事務局長による『Self-Empowerment 運動略史』に基づくものです》と書いている。

調べてみると『Self-Empowerment 運動略史』は雑誌 POZ のウェブサイトに 2011 年 7 月 7 日付で掲載されている。記事によると、デンバー原則は『1983 年 6 月、コロラド州デンバーで開催された第 5 回全国レズビアン・ゲイ保健会議兼第 2 回全国エイズフォーラムで PWA コーカス（委員会）が発表した』という。11 人の男性が壇上で『私たちは生きるために闘う』と大書した横断幕を掲げる写真も載っている。

いまとなっては当時の様子に詳しく分からない部分もあり、ここからは私の推測も交えた話になるが、そもそも会議の中心は第 5 回全国レズビアン・ゲイ保健会議であり、全国エイズフォーラムはその一部だったのではないか。PWA 委員会はその会議に向けてニューヨークやサンフランシスコなど全米から集まった PWA による会合で、その成果文書がデンバー原則となる。

《保健医療分野では急進的な考え方だったが、独創的な発想というわけではなかった。フェミニストによる健康運動や伝統的なコミュニティにおける癒しのシステムからも触発されている。だが、1983 年時点の医療関係者や製薬業界、公衆衛生政策の立案者はこの包摂的な考え方の擁護者ではなく、もっとはっきり言えば敵対者だった》（『Self-Empowerment 運動略史』より）

PWA として壇上に立つ 11 人の緊張感と切実な思いは察するに余りある。別の文献によると、会議は閉幕に近づき、PWA 委員会は報告書の提出ではなく、自ら語る場を求めたという。

会議主催者との間には多少の軋轢も生じたのではないかと思われるが、それでも発表の場は確保された。

そして、会場はその行動を敵意と逆風で迎えたわけではなく、PWA に対する 10 分間のスタンディングオベーションで締めくくられたという。

https://api-net.jfap.or.jp/status/world/booklet071.html

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第8回

土肥いつき DOHI ITSUKI
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

キャンプの経験が教えてくれたこと

前号（10月号）には、2度目のプログラムディレクターとしておこなった「やまびこキャンプ」の3日目午前までのプログラムについて書きました。ここまではグループタイムや自炊、あるいはさまざまなタスクをこなすプログラムを提供して、個々のメンバーの自主性とグループに必要な協調性を高めていくことを目的としていました。そのようにして育っていった各グループがひとつのキャンプになるプログラムとして、3日目夜の「まつり」を考えました。

「まつり」では、各グループがさまざまな料理をつくって夜店を出し、その後「スタンツ（寸劇）」をすることにしました。そのため、3日目の午後は、グループ全員でどんな料理をつくるのか、スタンツの演目をどうするのかなどを話しあう時間をとりました。

3日目の午前までは、グループ間に「競争」を持ち込んで、各グループの結束をはかりました。しかし、「まつり」では、夜店もスタンツも、自分たちが楽しむだけでなく、みんなを楽しませるためにもおこないます。グループ同士が「競う」のではなく「協力する」ことを通して、キャンプ全体を盛りあげたいと思いました。そして、最後のカウンシルファイアーでは、再びグループにもどり、メンバーで火を囲みながら3日間の振り返りをしました。

4日目のゲーム大会では、グループの縛りをなくして、キャンプ全体で遊び、やまびこキャンプを締めくくりました。

この年の「やまびこキャンプ」はおそらくは「成功」だっただろうと思います。なにより、カウンセラーひとりひとりが手応えを感じてくれたようでした。キャンプ後の打ち上げは大盛り上がりでした。わたしも興奮していたのでしょう、何度も「カウンセラー！集合！」と言って、乾杯を繰り返した記憶があります。

しかし、総括のミーティングではマネージメントの側から「準備不足」という指摘が多数出されました。ただ、この頃に仕事が忙しくなり、しばらく「やまびこキャンプ」から離れることになり、その指摘に応えることはできなくなりました。

数年後、たまたま日程が空いたわたしは、久しぶりに「やまびこキャンプ」のリーダーをすることになりました。その時のわたしの役割はマネージメントリーダーでした。それまで基本的にはプログラム系を担当してきたわたしにとって、マネージメント系の世界は驚きでした。

プログラム系のリーダーは、基本的にはプログラムと一緒に動きます。しかし、マネージメント系のリーダーは、時としてプログラムとはまったく違う動きをします。マネージメント系のリーダーの役割にはキャンプ場の環境整備も含まれます。例えば、自炊のあとに排水の詰まりがあるとすると、次の自炊までにその詰まりをとっておかなければなりません。キャンプの過程で出たゴミを焼くのもマネージメント系のリーダーの役割です。一見、キャンプとはまったく無関係な動きをしていますが、それもまたキャンプが円滑に進行するためにとても大切な役割となります。

さらに、マネージメント系のリーダーのもっとも大切な役割は、プログラムの準備と後片付けです。そのために、常にプログラムの「先」を読みながら行動する必要があります。マネージメント系のリーダーからプログラム系のリーダーを見た時、マネージメントに優しいプログラム運営と、そうではないプログラム運営の差は歴然としています。おそらく、2度目の「やまびこキャンプ」は後者だったのだろうと思います。では、マネージメント系のリーダーにプログラム系のリーダーの要素は不要なのかというと、そうではありません。プログラム系を経験したからこそ、プログラムの「先」を読むことが可能となります。この時の「やまびこキャンプ」では、マネージメントディレクターをしていた友人から「土肥のようなマネージメントリーダーがいたら安心だ」と言われました。

キャンプの経験は、グループとの距離感やプログラムの意味、そしてマネージメントを意識し続けることの大切さを、わたしに教えてくれました。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

トランスジェンダー入門

周司あきら／高井ゆと里著
集英社新書
定価 1056 円（税込）

理解のために最適な一冊

本書を読み終えた数日後の 10 月 25 日に、トランスジェンダーの性別変更に関わる大きなニュースが流れた。戸籍上の性別変更の要件を定めた「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」（略称「特例法」）の第３条の４「生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること」に、最高裁判所大法廷が全員一致で違憲判決を出したというニュースである。

翌日、新聞各紙は一面でこのことを大きく報じた。「概観要件」を保留するなど課題は残るが、トランスジェンダー当事者にとって一歩前進と言えるのだろう。

26 日の新聞、Ａ紙とＹ紙およびＳ紙の３紙を読み比べてみた。

Ａ紙は、１面で「性別変更に手術必要は違憲」、２面で「自らの性へ広げる道」、12 面社説で「人権見つめ法の是正を」、30 面で「安全な手術体制整備課題」、31 面で「体も心も幸せに生きたい」（当事者と識者の声）という見出しであった。28 面では、各裁判官の意見要旨と「特例法」成立の経緯と世界の潮流を解説していた。Ｙ紙は、１面、３面、11 面、30 面に、Ｓ紙は１面、２面、３面、６面、23 面、24 面に記事を掲載していた。

あくまでも筆者の印象だが、Ａ紙は当事者がおかれている状況を理解した内容（トランスジェンダーについての知識、当事者との接点が多い）であった。一方、Ｙ紙、Ｓ紙の記事には、知識不足や偏見のある内容が多いと感じる部分があった。

「トランスジェンダーとは」を知るのに最適な本が、本書『トランスジェンダー入門』である。本書の執筆者は、『トランス男性による　トランスジェンダー男性学』（大月書店）の著者と『トランスジェンダー問題　議論は正義のために』（明石書店）の訳者である。本欄で、筆者が以前に紹介したが、両書とも筆者には少し難解であった。その点では、本書は内容が深いわりにはわりやすかった。

「第１章　トランスジェンダーとは？」を読むだけで、「トラスジェンダーのことがほとんどが解る」といっても過言ではないくらい丁寧に解説してくれている。その内容は「トランスジェンダーの定義」、「FtM/MtF という表記」、「ノンバイナリーとは」、「『身体の性』『心の性』では説明できない」、「性別にまつわる二つの課題」、「よくある勘違い」など。第２章以下では，トランスジェンダーに関わるさまざまなトピックが解説されている。全体の章立ては、以下の通り。

「第２章　性別移行」、「第３章　差別」、「第４章　医療と健康」、「第５章　法律」、「第６章　フェミニズムと男性学」という構成である。第２章の性別移行については、①精神的な（性別）移行、②社会的な性別移行、③医学的な性別移行、などの項目がある。第２章では、今回の裁判に関する記事に書かれているさまざまな問題、懸念や疑問、課題への答えが見えてくる。

Ｙ紙の「女性を自称する男性が女子トイレや女湯などを使用することへの懸念は根強い。」「性別変更した元男性が、女性トイレや公衆浴場を利用しようとしてトラブルを生じる恐れもある。」、Ｓ紙の「女性と自称する男性が女性専用スペースに入ることを正当化しかねないとの不安は拭えぬままだ。」という類いの記述が両紙ともに数か所出てくるが、いかに的外れ、理解不足の内容であるかは、第５章を読めばよくわかる。Ｙ紙とＳ紙の記者の方々には、本書をぜひ読んでほしいと思う。

トランジェンダーの子どもたちと接する可能性の高い現場の教育関係者にも必読の書である。また学校の管理職の立場にある校長、副校長（教頭）もぜひ手に取ってほしい。　（教育ジャーナリスト　日向野一生）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

日本性教育協会（JASE）移転のお知らせ

事務局と資料室を下記のとおり移転いたします。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

【記】

新事務局での業務開始日　2023 年 11 月 20 日（月）より
住 所　　〒 101-0051　東京都千代田区神田神保町 1 － 3　冨山房ビル 5 階
電 話　　03-5801-6788　FAX 03-5801-6677
Email　　info_jase@faje.or.jp（変更なし）

東京メトロ半蔵門線／都営新宿線／都営三田線「神保町」駅A７出口より徒歩3分

★「JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室」のお知らせ★

移転のため、下記の期間を休室といたします。
【休室期間】2023 年 10 月 23 日 (月) ～ 12 月 1 日 (金)
【開　　室】2023 年 12 月 4 日 (月) 11 時～
【新資料室の利用予約】必ず事前に電話で予約が必要です。
2023 年 11 月 27 日（月）～（TEL03-5801-6788）にて

▶▶ 12月23日（土曜日）13：00～15：30 オンライン開催 ◀◀

北東北性教育研修セミナー2023･冬

トラウマを語るとき

性のありよう､「マイノリティ」としての経験

マイノリティとして生き、その中で性暴力被害を経験する。
そのことをどのように経験し、どのように内在化し、時に抗い、時に対峙し、語ることが可能なのであろうか。
LGBTIQ+ に関わる「理解」が語られる社会の中で、誰が理解しようがしまいが、今ここにある「生きづらさ」と向き合い続ける当事者たちがいる。自らのトラウマを語るということはどういうことなのか。またそこに SOGIESC という交差性がある時、それらはどう関与するのだろうか。自らの経験、そしてこれまで出会ってきたクィア性暴力サバイバーたちとの経験を踏まえ、語りを深めたい。
トラウマを語ることについて、一方的な語りだけではなく、みなさんと意見を共有できる時間も持てたらと思っています。

【講　師】

岩川ありさ：文学研究者。専攻は、現代日本文学、フェミニズム、クィア批評、トラウマ研究。現在、早稲田大学文学学術院准教授。主な著書に、『物語とトラウマ―クィア・フェミニズム批評の可能性』(青土社、2022年)。『群像』2023年7月号から、「養生する言葉」を連載中。「すばる」2023年8月号で、短編小説「僕と自分を呼ぶことが義務づけられた私」を発表。8月に現代書館から刊行された反トランス差別ブックレット『われらはすでに共にある』に「雑踏の中でも見つけられる」を書いている。

岡田　実穂：Broken Rainbow - japan の代表として LGBTIQA+ の性暴力被害に関わる市民活動（相談支援、政策提言、支援者育成等）を中心に、性の権利に関わる市民活動をしている（北東北性教育研修セミナー実行委員会、青森レインボーパレード コミュニティカフェ Osora ni Niji wo Kake Mashita etc）。

方　法 オンライン（ZOOM を使用）※詳細は申込者に直接連絡

参加費・問合せ先等

主　催：北東北性教育研修セミナー実行委員会　協　賛：日本性教育協会（JASE）
参加費：北東北（青森・秋田・岩手）在住の方、無料。北東北以外に在住の方 1000 円（事前振込）
申込み：http://ptix.at/DD7MXAまで､名前､連絡先メールアドレス､所属(ある方)を明記の上。

▶▶ 12月2日（土曜日）13：30～16：30（受付開始 13：00）◀◀

令和5 年度 東京都性教育研究会40 周年記念実践報告会

東京都における性に関する指導について

プログラム

（1）挨　拶　榎　茂喜（東京都性教育研究会会長）　伊東直晃（東京都教育庁指導部指導企画課体育健康教育担当課長）
野津有司（全国性教育研究団体連絡協議会理事長）

（2）実践報告・研究協議・情報交換

「小学校における性教育の実践について」大田裕子（北区立柳田小学校校長）
「自分らしく生きるための性教育～教員のための性別によるアンコンシャス･バイアス解消法～ 」石井友保（新宿区立西新宿中学校主幹教諭）
「性感染症・エイズとその予防～セルフケア理論を用いた実践～」千葉雅子（飛鳥未来きずな高等学校養護教諭）
「障害のある子供たちへの性教育を進めるために～東京都特別支援教育性教育研究会の再出発～」井上一仁（東京都立青山特別支援学校校長）

（3）指導・助言

「東京都における性教育の推進」先崎達彦（東京都教職員研修センター教育経営課統括指導主事）

会　場 喜山倶楽部（日本教育会館 9 階 千代田区一ツ橋 2-6-2 TEL 03-3262-7661）

申込み・問合せ先

申込み先：右のQRコード、または､所属､氏名及び教科名を明記して下記問合せ先まで。11月22日(水)締切。
問合せ先：東京都立稔ヶ丘高等学校主幹教諭　井谷　亨
TEL 03-3990-4226　FAX 03-3926-7523 メール Tooru_Itani@member.metro.tokyo.jp

すぐ授業に使える

性教育実践資料集

中学校改訂版

〈主な内容〉

第１章　中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）

第２章　性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）

第３章　指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／８つの１年生の指導事例／６つの２年生の指導事例／６つの３年生の指導事例／７つの個別指導事例／５つの組織の指導事例）

第４章　参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

定価 2,200 円（税込）　B5 判・224 ページ

「若者の性」白書

第8回　青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

序　章　第８回「青少年の性行動全国調査」の概要

第１章　変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化

第２章　青少年の性規範・性意識からみる分極化現象

第３章　家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか

第４章　知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題

第５章　青少年の性行動と所属集団の性行動規範

第６章　青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性

第７章　性的被害と親密性からの／への逃避

第８章　青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～

定価 2,420 円（税込）Ａ５判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会　　発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！